



TITLE:

音韻領域の諸相(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

久保, 智之

CITATION:

久保, 智之. 音韻領域の諸相. 京都大学, 2016, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r12989>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	久保 智之
論文題目	音韻領域の諸相		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文の目的は、(1)の2つである。</p> <p>(1) a. 個別言語の個々の音韻現象の一般化を示すこと。</p> <p> b. 統語論のあと（post-syntax）で起こる音韻現象が、どのような音韻領域で起こるかということに関して、タイポロジーを示すこと。</p> <p>ここで言う「音韻領域」とは、「当該の音韻現象が起こる領域」という意味である。それは、「疑問詞から、それをc-commandする補文化辞まで」といった比較的広い領域であることもあるし、「動詞語幹のあと」や、「母音iの前」といった、比較的狭い領域であることもある。</p> <p>以下、本論文の内容を、章を追って述べる。</p> <p>本論文の第2章は、福岡方言と釜山方言が、疑問詞疑問文の音調に関して、非常に類似していることを示すが、これは、両方言が系統的に親縁関係にあることを主張しているわけではない。ある種の地域特徴である可能性、言語普遍的な特徴をなす可能性も否定しない。2章で扱われている現象は、具体的には、下の (2)(a, b) のように、ダレ、ナニなど（に相当する）疑問詞から始まって、それをc-commandする補文化辞（\emptyset（音形ゼロ）、カ、モなど（に相当するもの））までが、1つの音韻句（minor phrase）となり、高く平らなピッチが続く、という現象である。疑問詞がなければ、下の (2)(c) のように、普通に基底のアクセントが現われる。</p> <p>(2) a. ([ダレガ キョネン キョート イッタ\emptyset]) ↑ <誰が去年京都行った？>（<u>すべて高いピッチ</u>）</p> <p> b. ([ダレガ キョネン キョート イッタ1カ])（ワスレ1タ） <誰が去年京都行ったか忘れた>（<u>1カでピッチが下がる</u>）</p> <p> c. [(キョ1ネン)（キョ1ート）（イッタ1カ）（ド1ーカ）] （ワスレ1タ）（<u>基底のアクセント1が現われる</u>） <去年京都行ったかどうか忘れた></p> <p>↑：上昇イントネーション。</p> <p>1：アクセント（下がり目）。名詞には基底形で指定されている。</p> <p>動詞には、無標アクセント付与規則で付与される。</p>			

[]: 節境界。

(): 音韻句（アクセント句）境界。

疑問詞と補文化辞がどんなに遠く離れていても、この現象は起こる（途中で息継ぎが必要であれば、ポーズを入れることは可能だが、それは文法の問題ではない）。この現象を一般化するために、本論文では、統語論のあとに働く規則として、(3) を提案している。

(3) 音韻句形成規則：疑問詞から、それをc-commandする補文化辞までを、1つの音韻句（minor phrase）とせよ。

実際には、下の(4)のような埋め込み文がある構造では、c-commandだけでは十分でない。Q1はWH1もWH2もc-commandすることになるが、「係り受け」の関係は、WH1とQ1、WH2とQ2の間にだけあるので、「～と関係付けられているbe associated with...」といったことを表わす、indexを付与しておく必要がある。

(4) [WH1...[WH2....Q2]...Q1]

これに加えて、1つになった音韻句内の基底のアクセントを実現させないこと、また、1つになった音韻句にアクセントを付与することが必要である（間接疑問文(2)(b)の場合）。釜山方言でも、ほぼ同じ現象が起こる。この現象を本論文では「音の係り結び」と呼んでいる。

これらの現象には、統語論のあとで働く音韻過程が一般的にそうであるように、例外がない。本論文では、主文と従属文に共に疑問詞がある場合や、多重疑問詞疑問文の場合など、構造的に複雑な場合にも、いくつかの一般言語学的に見てあり得る仮定をすることで、一般化が可能であることを示している。考察対象には問い返し疑問文も含まれ、また章末で、日本語標準語における「音の係り結び」をも考察している。まず、疑問詞からそのスコープの終わりまでが、アクセント減衰の範囲となることが示される（1つの音韻句にはならないが、高いピッチの部分が次第に低くなってゆく）。また、疑問詞と「モ」の間が1つの音韻句になり、高く平らなピッチが広がる現象を見て、これらの音調現象が、福岡方言や釜山方言の「音の係り結び」と深く関連していることが示される。

第3章では、まず、ハルハ・モンゴル語の繰り返し構造（reduplication）を記述する。これは、*kubo*＜久保＞ → *kubo mubo*＜久保とか＞のように、単語を繰り返して、繰り返し部分の冒頭の子音を*m*にするという現象である。本論文では、この現象が名詞だけではなく、動詞にも起こることを指摘すると共に、[[A [B C]]]のような2つ

以上の構成素からなる連続にこの現象が起こる場合も、最後の構成素Cだけが繰り返されることを示す。この最後の構成素だけが繰り返される現象は、「音韻論的複合語化」と考えられる。この現象も、統語論のあとで起こる現象であり、例外はない。第3章では次に、日本語標準語の繰り返し構造を記述する。「バラバラ」「バ1ラバラ」などの擬音語・擬態語や、「ガクセーガ1クセーしている<いかにも学生らしい>」「ハクロンハクロン言う1な」などの、日本語の繰り返し構造がもつ音調の規則性を見る。構造によって、同じアクセント・パターンの単なる繰り返ししか、複合語アクセントが現われることを指摘している。

第4章では、シベ語、満洲語、現代ウイグル語の3言語の、動詞語幹が関係する音韻現象を記述した。シベ語では、[Dorsal, -high] の素性をもつ母音 (a, o) と子音 (q, g, χ) が trigger となって、動詞語幹に隣接する完了接辞等まで [-high] の調和が及ぶことを示した。満洲語では、母音調和が、動詞語幹に隣接する未完了および完了形態素までしか及ばないことを示した。現代ウイグル語では、側面音の異化が、動詞語幹に隣接する受身・再帰形態素までを範囲として起こることを示した。この3言語における母音/子音調和および異化には、例外が見られる。これらの例外については、レキシコン（心的辞書）に記載されている個々の動詞語幹についての情報が、統語論のあと、動詞語幹にアスペクト、ボイスなどの接辞が隣接する際に、参照されるものと考えられる。

第5章では、アクセントの中和の諸相が示され、また音韻領域の諸相についてのまとめが付される。また、局所的な音韻現象の例として、日本語標準語の名前（姓と名のうち、名のほう）のアクセントに関わる現象を示している。これは音韻論的な条件で異形態の交替（アクセントの交替）が起こる現象である。

以上のように本論文では、統語論のあとで起こる音韻現象について、種々の音韻領域の違いによる、4つの類型を見ている：

- (5) a. 音韻句や音韻語などの韻律範疇に関わる現象
- b. 繰り返し構造などの複合語化に関わる現象
- c. 異形態の実現に関わって語幹と語尾（接辞）の間に起こる現象
- d. 異音や異形態の実現に関わる局所的な現象

また、(5)(c)のような形態論的情報が直接関わる場合には、例外があり得ることを示す。(5)(d)は局所的な現象であるが、(5)(a-c)は、統語論的情報や形態論的情報をもとに形成された音韻領域のまとまり（シンタグマ）を表わす機能をもっているとも言える。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、日本語博多方言、韓国語釜山方言、モンゴル語ハルハ方言、シベ語、満洲語を対象として、これらの個別言語の個々の音韻現象の一般化を示し、統語論のあと(post-syntax)で起こる音韻現象が、どのような音韻領域で生起するかということに関して類型を示している。論者はこれらの言語で音韻領域にかかわる興味深い現象を多く発見し、言語学的な一般化を行っている。

本論文は5章からなる。第1章で本論文の目的と概要を述べたあと、第2章では論者が「音の係り結び」呼ぶ現象を扱い、疑問詞疑問文の音調が疑問詞のスコープと関連していることを福岡方言と韓国語釜山方言によって示している。これらの言語では日本語、韓国語の疑問詞から始まって、それをc-commandする補文化辞までが、1つの音韻句(minor phrase)となる。この音韻句のなかでは、辞書的アクセントがなくなり、高く平らなピッチが続く。すなわち音韻句があたかも一つの語になったかのように1つのアクセントが付されるわけである。この現象は、疑問詞と補文化辞がどんなに遠く離れていても起こる。統語論の出力に働く音韻過程が一般的にそうであるように、この規則には例外がない。本論文では、主文と従属文の両方に疑問詞がある場合や、多重疑問詞疑問文の場合など、構造的に複雑な場合にも、いくつかの一般言語学的な仮定をするだけで同様の一般化が可能であることを示している。

この現象は早田輝洋氏が博多方言で成り立つことを発見したものであるが、韓国語釜山方言や東京方言でも成り立つ一般的な現象であることを示し、それが統語論と音韻句形成と深くかかわっているということを示して、その理論的な意味を与えたのは論者であり、その独自性が内外で高く評価されている。

第3章では複合語という音韻領域と繰り返し構造が密接に関連していることを示している。まず、ハルハ・モンゴル語の繰り返し構造(reduplication)を記述している。これは、*kubo* <久保> → *kubo mubo* <久保とか>のように、単語を繰り返して、繰り返し部分の冒頭の子音を*m*にするという現象である。本論文では、この現象が名詞だけではなく、動詞にも起こることを指摘すると共に、[[A [B C]]]のような2つ以上の構成素からなる連続にこの現象が起こる場合も、最後の構成素Cだけが繰り返されることを示している。この最後の構成素だけが繰り返される現象を「音韻論的複合語化」としてとらえている。論者は次に、日本語標準語の繰り返し構造を記述し、「バラバラ」「バ1ラバラ」などの擬音語・擬態語や、「ガクセーガ1クセーしている<いかにも学生らしい>」「ハクロンハクロン言う1な」などの、日本語の繰り返し構造がもつ音調の規則性を論じ、構造によって、同じアクセント・パターンの単なる繰り返しか、複合語アクセントが現われることを指摘している。論者はハルハモンゴル語、日本語の繰り返し構造も「音韻論的複合語化現象」であるととらえることでその相関を明らかにしている。

第4章では、シベ語、満洲語、現代ウイグル語の3言語の、動詞語幹が関係する音韻

現象として母音調和などの素性の調和現象を取り上げている。シベ語では、[Dorsal, -high] の素性をもつ母音 (a, o) と子音 (q, ɢ, ɣ) が引き金となって、動詞語幹に隣接する完了接辞等まで [-high] の調和が及ぶことを、満洲語では、母音調和が動詞語幹に隣接する未完了および完了形態素までしか及ばないこと、現代ウイグル語では、側面音の異化が、動詞語幹に隣接する受身・再帰形態素までを範囲として起こることを示した。この3言語における母音/子音調和および異化には、例外が見られる。これらの例外については、レキシコン（心的辞書）に記載されている個々の動詞語幹についての情報が、統語論のあと、動詞語幹にアスペクト、ボイスなどの接辞が隣接する際に参照されるものと考えられるとしている。

第5章では、アクセントの中和の諸相を示し、また音韻領域の諸相について、まとめを行なっている。また、局所的な音韻現象の例として、日本語標準語の名前（姓と名のうち、名のほう）のアクセントに関わる現象を示している。これは、音韻論的な条件で異形態の交替（アクセントの交替）が起こる現象である。

以上のように本論文では、統語論の出力にかかる音韻現象について、種々の音韻領域の違いにより、次の4つの類型を論じている：

- a. 音韻句や音韻語などの韻律範疇に関わる現象
- b. 繰り返し構造などの複合語化に関わる現象
- c. 異形態の実現に関わって語幹と語尾（接辞）の間で起こる現象
- d. 異音や異形態の実現に関わる局所的な現象

本論文は、日本語、韓国語および、アルタイ諸語と呼ばれる言語を広く見渡し、そこに見られる種々の音韻領域と音韻現象の関係を論じており、文法の中における音韻論の位置づけに関する研究に、大いに貢献する優れた論考である。しかし、問題がないわけではない。本論文は何年かにわたり発表されてきた論文をまとめたものであるため、第2章が長すぎるなど多少バランスが悪い。また、第5章はまとめの部分と分析の部分とを分離した方がよいかもしれない。しかし、これらは論文の体裁に関するもので、本論文の価値を大きく減じるものではなく、将来出版に際しての修正が可能である。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成28年2月10日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。